

あなたのつらい心が、

ふっとラクになる・・・

お釈迦様の智恵をお伝えします。



こんにちは。佐々木です。

これは大切な読者の皆様への、私からのささやかなプレゼントです。

なんだか気持ちが落ち込んだり、辛くなった時・・・

仕事に疲れたりして、ふっと、一息つきたい時・・・

そんな時に読まれて、少しでも

辛い気持ちがふっとラクになって頂けたら・・・

これほど、私にとって嬉しいことはありません。

それでは、よろしく願いいたします。

佐々木 敦

「すべての人にとって、
最も知りたいこと」。



それは、何でしょうか。

地球上で今日だけでも、70億の人口があり、
古今東西、数えきれないほどの人間が、
数々のドラマを繰り広げ、今もまさにそれが展開しています。

それらの人たちみな、知りたいこと。

知りたかったこと、そしてこれからも知りたいと思うことは
何でしょうか。

お釈迦様の教えを、「仏法」とも言われます。

「法」という言葉は、今日、

憲法、法律、法規などの言葉で使われますが、

憲法であれば、改正には大変嚴重な手続きが必要ですし、

また、交通法規であれば、朝、赤信号がとまれたのに、

夜には赤信号が進めになっている、

そんなことでは困るわけです。

一般に、「法」という字が使われるものは、

頻繁には変わらないもの、また、変わってしまったは困るもの。

そういうものが、「法」です。

しかしこれは、その土地、その時代の状況によって

人間が決めたものですから、全く変わらないものではありません。

というよりも、時代や状況によって変わってゆくものですし、

また、変えてゆかねばならないものです。

一方、お釈迦様に教えにおいて、「法」とは、

古今東西通じて変わらぬもの、

仏教の言葉では、「三世十方を貫くもの」をいわれます。

ですから、「仏教」を「仏法」と言われるのは、
古今東西すべての人にとってあてはまること、
「いつでもどこでも変わらないこと」を教えられているからです。

そのお釈迦様の教えの「根幹」といわれるのが、因果の道理です。

「根幹」とは、根っこであり、幹であるということです。

根っこがなければ木は枯れてしまいますし、

幹を切ったら木は倒れてしまいます。

「因果の道理」が「仏教の根幹」と言われるということは、

因果の道理がわからなければ、仏教はわからないということです。

ではまず、「道理」とは、どんなことかと言いますと、

いつでもどこでも変わらないもの。

三世十方を貫くものを言われます。

ですから、道理とは、法です。

「因果」とは「原因と結果」ということですから、

古今東西変わらぬ、原因と結果の関係を
教えられた法則が因果の道理です。

これをお釈迦様は、大変シンプルに教えられました。

「善因善果
悪因悪果
自因自果」

善いタネをまけば、善い結果が現れる。

悪いタネをまけば、悪い結果が現れる、ということです。

「瓜のツルにナスビはならない」と言われるように、
まいたタネに応じた結果しか、現れては来ないのです。

私達にとって、最も知りたいことは、

「自分の運命がどのようにして、決まるのか」

ではないでしょうか。

私達は、何のために生きているのか。生まれてきたのか。

不幸を求めてのことではありません。幸福を求めて生きています。

その幸福や不幸という運命は、何によって決まるのか、その原因と結果の関係をお釈迦様が明らかにされたのが、因果の道理です。

「因」とは私達の「行い」であり、「果」とは私たちの「運命」です。

一言で言えば、
「私達の運命は、自分の行いが作ったものである」
と明らかにされたのです。

「自因自果」とは、「自業自得」とも言われます。

今日私達もよく使う言葉です。

「業」とは行い、「得」とは運命ですから、
自分の運命は、自分の行いが創りだしたものなのだよと、
言われているのです。

これは、お釈迦様の教えから出た言葉ですが、
日本人の日常の中にすっかり、溶けこんでいることを知らされます。

よく、「それは、自業自得だよ」と言われることがありますが、

決して悪いことだけではありません。

善い結果も、「自業自得」です。

また、「これは、自業自得、でも、これは自業自得でない」というものもないのです。

善いのも、悪いのも、どんな結果も、すべて自業自得です。

自分の身の上にかき起る運命、結果の全ては、善いのも、悪いのも、例外なく、私の行いが生み出したものなのだ、はっきりと明らかにされたのがお釈迦様でありました。



「それは自業自得だよ」



わかっているけど、他人からこう言われると、へこんでしまう——。

これはしかし、本来悪いことだけに使われる言葉ではありません。

とはいえ、事故にあったり、病気になったり。

私達の身の上には、たびたび、望まざる結果がもたらされます。

私たちは、目の前の結果に対して、どう受け止めゆけばよいと、お釈迦様は教えておられるのでしょうか。

「それは、自業自得だよ」と言われますが、

決して、一部の人や、一部の結果に対してだけではなく、
すべからく、私達の身の上にかかる運命のすべては、
善いのも、悪いのも「自業自得」であるとお釈迦様は明らかにされました。

そう知らされればこそ、善い結果が帰ってきた時には、
もっと頑張ろうと、より一層「努力」せずにおれなくなります。
同時に、ロクなたねまきをしていない自分であることも
知らされてきますから、
そんな中、なぜ自分がこんなに恵まれるのかと、
「感謝」の気持ちも起きてきます。

「この世で最も不幸な人」とは、どんな人でしょうか。

お金がない人。

仕事を失った人。

人間関係のトラブルに巻き込まれている人。

仕事上の責任に押しつぶされ、どうしようかと、

いつも頭を抱えている人。

世の中で不幸だと思われる人は、たくさんありましよう。

しかし、「感謝の心の無い人」こそ、
実は最も不幸なのではないでしょうか。

どんな善い結果を得られても感謝の心の起きない人は、
言葉を換えれば、どんな幸せも喜べないという事です。
そんな人は、とても不幸な人でしょう。

逆に、他の人には取るに足りないことであつたとしても、自分は
有り難いと感謝できる人は、幸せな人でしょう。

感謝の気持ちができる人は、恵まれた幸せを感じて
なればこそ、もっと頑張ろうと努力せずにおれなくなりますから、
より幸せになってゆくことでしょう。

逆に、どうにも努力できない人、
どうせ頑張っても結果はでないと思っている人。
自分が頑張っても、その結果は
他へ行ってしまうと思っている人は、
もっと恵まれていいはずなのにと、愚痴や不満を漏らしてしまう。
そこから前向きな努力は出てきません。

お釈迦様は、自分のまいたタネの結果が
他の人のところへ行ったり(自因他果)、
他の人のまいたタネが自分に結果となって
帰ってくること(他因自果)は絶対はないと、教えられました。

自分が勉強すれば、自分の成績が上がるのであって、
友達の成績があがると思ったら、誰も一生懸命勉強する人はいないで
しょう。

酒を飲んで酔っ払って怪我をするのは、飲んだ本人であって、
隣の人がフラフラになるということはありません。

「なぜやめぬ 怨み呪えば 身の破滅」

怨み、妬み、そねみの心のほど、自分を苦しめるものではありません。
この心を、お釈迦様は「愚痴」と言われたのです。
愚痴とは、明らかな自業自得の道理を認めぬ、
愚かでバカな心です。

あいつのせいだ。お前のせいだ。
会社が悪い。友達がやったことだ。

上司がにくたらしい。

家族が悪いんだ。

そこからは、怨み、憎しみしか出てきません。

怨み、憎しみから出る言動は、私を身も心も泥沼に嵌り込ませるばかりです。

私達の身の上に起きる一切は、
決して善いものばかりではありません。

それどころか、望まざる結果に悩まされることが、
圧倒的に多いのではないのでしょうか。

そんな時、自業自得と知らされている人は、
「懺悔」の心が出て来るのです。

悪い結果がやってきたということは、
間違いなく、自分が悪いたねまきをした結果に
他なりませんから、懺悔のほか無いのです。

「自分が悪かった」、「悪かったのは私です」という心。

これは、苦しみがやってきた時には「特効薬」です！

お試しあれ————。

とはいえ、これが本当に難しいのです。

「自分も、悪かった」・・・でも、あの人はもっと悪い。

これでは、本当に自分が悪かったとは思っていない。

「自分が、悪かった」・・・他人ではなかった。

そう振り返れて初めて、心がすっと楽になります。

一口に懺悔といっても、浅い懺悔から深い懺悔までピンからキリあります。

「悪いのは私だった・・・」

そう思ったのに、1年もすれば繰り返してしまう浅い懺悔もあれば、

二度と、繰り返さない深い懺悔もあります。

懺悔が深ければ深いほど、同じ悪いたねまきは

繰り返されることがないでしょう。

善い結果に恵まれば「感謝と努力」、
悪い結果に報われたら「懺悔」。

このような人間の生き様は、
お釈迦様の教えられた因果の道理から出てくるのであります。



「何で自分がこんな目に・・・」



そう思う事例は、日々に事欠きません。

特に起きた苦しみが大きければ大きいほど、
その気持ちが癒えることは、永遠にないようにさえ、
思われます。

お釈迦様は、善いのも悪いのも、
自分の運命のすべては、自分の行いによって
決まるのだよと、「自業自得」の道理を明らかにされました。

この道理が分かると、悪い結果が報いた時には、
懺悔の心が出てくるのです。

しかし、まさか、こんな結果が帰ってくるなんて—————。

そんな時、懺悔の心どころか、全身火の玉となって、愚痴と不満で苦し
み、
毒吹きつつも、自業自得とは認められないのです。

「まいたタネは、必ず生える。まかぬタネは、絶対に生えぬ」

このシンプルな運命の原因と結果の法則こそ、
古今東西の全人類にとって共通する道理であると、
お釈迦様は明らかにされました。

ところで私達は、今朝何を食べたか覚えているでしょうか。
ふと聞かれて、そう言えば・・・となる人も多いのではないのでしょうか。

もしそれがスラスラ思い出せた人は、昨日はどうだったでしょうか。

では、1年前は。

いや、10年前の今日は、朝何を食べていましたか？

覚えている人はいないでしょう。

どうにもおなかが痛いと思って、

そういえば、昨晚あんなものを食べたっけ、と

ふと思い出すことがあります。

私達が年間に摂取する添加物は4リットルほどとも言われ、

それらが体外に排出されることが無いとすれば、

どれだけの結果が起きることか、

考えただけで恐ろしくなります。

知らない、ということもあるでしょう。

それ以上に、私は何を食べたのか、

忘れてしまっています。

たった10年前でさえ、そうなのです。

ましてや30年前はどうか、
覚えておれる道理がありません。

なぜ、我が身に苦しみがやってくるのか。

私達は、まいたタネを、忘れていただけなのです。

「タネ」とは行為です。

「生える」のも結果なら、「生えぬ」のも結果です。

交通事故が起きる。

まかぬタネが生えたのでしょうか。

そうではありません。

普段恐ろしいタネをまいておりながら、きれいに忘れていただけなので
す。

まかぬタネが生えるということ、

古今東西絶対にないとお釈迦様は明らかにされました。

他人が事故にあったのではありません。

前の車でも、後ろの車でもない、事故にあったのは
私の車だったのです。

貸した金は忘れないのに、借りた金はすっぱり忘れる。
ご都合主義の私達は、悪いタネをまいた記憶を、
次の瞬間から忘れてゆきます。

私達が生まれたということは、「結果」です。
日本に生まれた、アメリカに生まれた、
中国に生まれた、インドに生まれた。
場所だけでも、いろいろな土地があります。

昭和に生まれた、平成に生まれた、
江戸時代に生まれた、弥生時代にもたくさんの方がいました。
また、100年後、1000年後に生まれる人もあるでしょう。

どんな両親のもとに生まれるのか。
どんな賢い才能と優れた器量を持って生まれるのか。

「生まれた」ということは1つの結果です。
「平等」といえば1つの理想のようですが、

あまりにも、「生まれた」その結果には「差別」があり過ぎます。

では、その原因はどこにあるのでしょうか。

原因無しに、結果が現れることは、

絶対にないと、お釈迦様明らかにされました。

みな、結果です。

まいたタネが、生えたということなのです。

この行いには、大変な力があるとされます。

「業力(ごうりき)」と言われ、大象百匹よりも、強いと説かれます。

当時インドで最も力の強い動物が象でした。

この、百とは99より1多いということではなく、

満数と呼ばれて、数限りなく多いことを表しています。

ですから、世界中のブルドーザー引っ張ってきても、

かなわないのが、この業力だと言われるのです。

この目にみえない力が私達の心に収まり、

縁が来たら結果となって現れるのだよと、
明らかにされたのがお釈迦様でした。

「年ごとに 咲くや吉野の山桜
木を割りて見よ 花のありかは」

春になると、実に美しく桜の山となる、吉野山。
冬に山を訪ねてみても、枯れ木のような木が
つくんつくんと立っているだけです。
枝を一部刻みにしてみても、花びら1枚出てこない。

目に見えない桜の勢力(生命力)が因となり、
春の陽気という縁によって、
あでやかな花が、私達の目の前に現れます。

花という結果は目に見えます。

一方、勢力という因は目には見えませんが、
間違いなく木に内在する力です。

衝突を引き起こす因を持たない人が、

事故に合う道理が無いのです。

その不滅の業力によって、悲しい結果が起きたのだと、お釈迦様は教えられました。

生まれない前の、ずっとずっと過去からやってきた業も全て収まっているのです。

昨日のことさえ忘れてるのが私達です。

10年、20年前であればなおさら、自分の行いは、すっぱり忘れてしまっています。

古今東西すべての人に共通する、この因果の道理、正しく聞かなければ、とても理解できるものではありません。

我々の運命のすべては、自業自得であると、お釈迦様は、徹頭徹尾明らかになされました。

この因果の道理から、お釈迦様は、善いことをしなさいと勧められ、七千余巻を一言で言えば、「廃悪修善」であると言われるのは、そのためです。

お釈迦様の教えにおいて、

教えを「聞く・知る」と、
教えのとおり「実行する」ことは、
共に、両方必要で、大事です。



教えを正しく聞くことは、とても重要です。

しかし、聞いてだけで実行しなくては進まないのです。

逆に、実行が大事だからと言って、

正しく教えを理解した上での実行でなければ、

とんでもないところへ行ってしまう。

丁度、車の両輪のように、
片方だけで、まっすぐ進むことはできないのです。
車軸に片方、車輪が外れていては、
同じところを、堂々巡りするだけで、
どれだけ転がしても、前へは進まないのと同じです。

試験で答案を書かなければ、
「答えがわかっていた」と、言い訳は通用しません。

「朝刊、読んできた？」と聞かれて、
「読んできました」と答えても、
内容を聞かれて答えられなければ、新聞を読んだことになりません。

「あの道を、右へ行って、次は左ですよ」、
と道案内を受けたのに、最初の角を左に曲がってまっすぐ進んでいては、
聞いた事になりません。

「聞いた・知った」とは、そのとおり「実行」してはじめて、
そう、言えるのです。

お釈迦様の教えの根幹は、「因果の道理」です。

この因果の道理を正しく聞けば、
必ず出てくる心は、「廃悪修善」の心です。

お釈迦様の説かれた「私達の運命の原因と結果の法則」は、

善因善果

悪因悪果

自因自果

でした。

この道理がわかれば、みな悪い運命(不幸や災難)は
イヤですから、自分に悪い結果がやってくるのを避けるために、
悪いたねまきをやめよう(廃悪)という心が起きます。

また、みな善い運命(幸せ)がほしいですから、
自分に善い運命をもたらすためには
善いたねまきをしよう(修善)の心が起きてきます。

ですから、どれだけ因果の道理が判ったかどうかは、

この、「廃悪修善」の心がどれだけ強いかを見れば判る、と言われます。

この心の強さは、どれだけ、お釈迦様の教えを正しく聞き取っているかどうかのバロメータであると言われます。

「善いことをやりなさい、悪いことをやってはなりませんよ」と聞いて、「そんなの、3才の子供でも知っているよ」と言っても、実際そのとおりを実行しているでしょうか。

子供に、「嘘をついてはいけない」と教えるでしょう。

「生き物を殺してはならない」とも注意するでしょう。

「約束を破ってはならない」と言えば、

「悪口を言ってはいけませんよ」とも叱ります。

「じゃあ、お父さんは？」「お母さんはどうなの？」

「あの一、先生は？」

「でも、お兄ちゃんはどうなん？」「お姉さんは？」

聞かれたら、あなたはどうか答えますか。

まあ、もつとも最近は、どういふことも
言わないのかもしれませんが・・・。
それはそれで、困ったことです。

「判っている=できている」の方程式は、成り立たないのです。

「判っているつもりです」と言う人もあるでしょう。

でも、考えてみてください。

「ご飯を食べたつもり」は、まだお腹ペコペコです。

「持ってきたつもり」は、忘れて来たということです。

学生は「勉強したつもり」で、単位を落とし、

会社員の「確認したつもり」で、書類の間違いが発覚します。

「つもり」は、「実行していない」ことを、自ら、認める発言なのです。

「判っているつもり」は、実は、判っていないのです。

判っていないのは、「知らない」のです。

中国は唐の時代、白樂天という有名な詩人がありました。

白居易という名前でも知られ、儒学者としても今日有名ですが、
多く作品が残されています。

いわば、今を時めく売れっ子詩人、とでもいいでしょうか、
白楽天は、かねてから、仏教の教えを知りたいと思っていたと言われま
す。

しかし、一度有名になってしまうと、
そんじょそこらの集まりなどに顔を出して、学んでみようとは思わない。

何か、しっかりした高僧から聞く機会があればと、
機を伺っていたのですが、時が過ぎていたのです。

或る時白楽天が、森の中を散歩していると、
木の上で座禅瞑想している1人の僧侶を見つけました。

高所で、目をつぶって座禅瞑想しては危険だ。
白楽天思わず、声をかけたのです。

「おーい、危ないぞ」

何か考えがあって、そこに座っていたであろうに、
全く初対面のあかの他人に対しても、ぶっきらぼうに
そう言葉をかけるとは、よほどの自信があったのかとも、
自惚れ心も感じますが、
樹上の僧侶は、白楽天をチラリとも見ず、
一言のもとに、言い返したのです。

「危ないのは、そなたじゃぞ」

恥じ入るような言葉を想像していて、虚を突かれたのか、
微動だにもせず、はっきりと言い返したこの威容に
ただならぬものを感じたのか、白楽天は、
これは、もしかすると、かなりの高僧かもしれぬ・・・と直感したのです。

そして、さらに実力を試してみたいと思ったのか、
言葉を改め、こう切り返しました。

「私は、名も無き白楽天と申すもの。
失礼だが、貴僧の名を承りたい」

慇懃無礼とはこのことで、ここまでのやりとりからしても、

今を時めく詩人が「名も無き」とはちゃんちゃらおかしいのですが、
いよいよ今や両者刀を抜いたかのような、
斬るか伐られるかの腹の探りあい。

樹上の僧侶は、即座に返答した。

「私は、名も無き鳥巢と申す者」

実は、この鳥巢禅師と言われていた僧侶、
大変な高僧であったのです。

当時、この僧侶の名を知らぬ者は無いほどでありましたから、
白楽天、名前を聞いて大変驚いたのです。

そして白楽天、かねてからの願いを叶えるは今とばかり、

「私は、かねてから、仏教にどんなことが教えられているのか、
知りたいと思っていたのだが、

釈迦が生涯何を説かれたのか、一言で言うと何であるか」

と尋ねたのです。

高僧に向かって不躰というか、遠慮がないというか、
お釈迦様45年間の7000冊以上のお経に何が説かれているのか、
それを、一言で言え、という問自体、相手を試していると思えな
い・・・

7000冊を完全に網羅し、的確に全体像を把握していないければ、
答えられる問でないからです。

しかし、鳥巢禅師は、一切たじろぐ様子なく、即答したのです。

「もろもろの悪をなすことなかれ、
もろもろの善を行いたてまつれ」

これは、七仏通戒偈と言われる、

いかなる宗派においても共通して説かれる偈文(うたの文句)の一部で
す。

諸悪莫作(もろもろの悪をなすことなかれ)

衆善奉行(もろもろの善を行いたてまつれ)

自浄其意(みずからその意[こころ・心]をきよめよ)

是諸仏教(これもろもろの仏の教えなり)

悪いことをやってはならぬ。

善いことをしなさい。

そして、心でやましいことを思っていないはならぬ。

これが、仏教で共通して教えられることである。

一言で言えば、「廃悪修善」の教えです。

7000冊の一切経を一言で言え、と言われたら、

仏教の根幹である因果の道理から、「廃悪修善」になるのです。

ですから、鳥巢禅師の答えは、極めて的確なものでした。

しかし、それを聞いた白楽天は即座にこれを鼻で笑うと、

「ふん、そんなことは、3才の子供でも知っているよ」と答えたのです。

すると鳥巢禅師、これに対して大喝一声、

「3歳の童子もこれを知るが、80の翁もこれを行うこと難し」

3才の赤ん坊でも、知っている。

しかし、80の齢を重ねても実行できる者は稀である。

観念の遊戯だけで通ろうとしていた誤りを、ズバリ指摘されたのです。

聞いた、知っただけでは通れない、教えに基づいた実践こそ、

大切であることを教えられています。

相手のことを思って、
心からやったはずなのに、
どうして————。



得てして、よかれと思ってやったことが、裏目に出ることがあります。

納得できない結果に、ふと落ち込むことも。

お釈迦様の教えを「慈悲の教え」と言われます。

「慈悲」という言葉は、「あの人は、慈悲深い人だ」とか、

「無慈悲な人だ」などと、日常的にも使われます。

仏教では、「慈悲」とは「抜苦与楽」であると言われます。

「苦を抜き、楽を与える」ことです。

この世で最も純粹な慈悲は、母の子に対する「慈悲」でありましょう。

「慈悲」の「慈」は「抜苦の心」。

夜中に子供が高熱を出して苦しみ始めれば、

どんなに寒く、夜遅くとも病院を連れてゆく。

子供の苦しみが我が事のように。

子供の苦しみを、黙って見てはおれぬのが母の心です。

「慈悲」の「悲」は「与楽の心」。

小学生の頃、どうしてうちのお母さんは、

魚の骨が好きなんだろう、と思っていたという

投稿記事に胸打たれたことがありました。

いつも、母は、魚を食べるとき、

「お母さんは、骨が好きなの」と言って、

おいしい身の部分ばかりを与えてくれた。

どうして、お母さんは、骨が好きなんだろう、

かわっているなあ、おいしい身を食べればいいのに、

と思っていた自分が、親の立場になって当時の母の気持ちを知り、泣けてきた、という記事でした。

自分が楽しむことよりも、子供が楽しむ姿を見るのが嬉しい。

そんな心が母心です。

そんな母心あればこそ、今の自分があると、感謝せずにおれません。

昔のこと、冬のある寒い日、ある人が川の魚を見ていると、

大変寒そうにしているように見えたのです。

石のそばに身を寄せ合っているようにしていたそのすがたが

とても健気に見えたので、一計を案じ、

木の枝を組んで筒状にした「魚のすみか」を作り、

川に沈めたところ、魚たちは、喜んでそのすみかの中に入り、

喜んでいるように見えました。

それを見届け、よかった、よかった、と思ったのです。

話はここで終わりません。

その後、そこを通りかかったのは、漁師でした。

川の中に変わったものが沈んでいると、それを持ち上げたところ、

スルリと中から数匹の魚が滑り落ちました。

それを見た漁師、ふと一計を案じたのです。

出口を縛り、入り口を工夫したら、魚捕りに使えるのでないか。

筒状だった道具の、川下の側の口を縛り、魚が逃げられないようにし、
また、川上の側の入り口は、奥に入るに従って細くなるような仕掛けを施し、

流れにまかせて中に入った魚が戻れないようにと、加工しました。

「ちょうどよい魚捕り道具ができたわい」と、

漁師は喜んで帰りました。

実は、この魚捕り道具の原型の「魚のすみか」を作ったのが、

興福寺の管長であったところから、

この道具には興福寺と名付けられました。

魚を愛しく思って作った道具が、のちに加工され、

魚を捕らえる道具として広まったのです。

しかも殺生を罪と教える寺の名前が

その道具についたもの皮肉でした。

私達は、得てして、よかれと思ってやった行為で
却って相手を苦しめることがあります。

人間の慈悲は、盲目であるからです。

お釈迦様は、これが人間の慈悲の欠点であると教えられました。

相手を本当に助けるとは、どういうことなのか。

仏の智慧に裏付けられた、仏の慈悲を説かれたのが、
お釈迦様でありました。

よく、仏教精神とはどんなものか、
と尋ねられることがあります。



これは一言で、布施の精神であると言われます。

「布施」とは、お釈迦様の教えられた言葉ですが、
今日の言葉では、「親切」と言えます。

親切とは、相手に与えること、施すことです。

与えることだけ考えよ—————。

これこそ、恵まれる秘訣なのでしょう。

もちろん、お金やものを与えたり、あげたりするのも親切ですが、何もなくても、できる親切もたくさんあります。

詳しくはまた別の機会にご紹介できればと思いますが、この、布施の精神を、自利利他の精神とも言われ、これが、お釈迦様45年間の教えの真髄であると言われます。

相手に幸せになってもらいたい(利他)心で施すままだが、自分の幸せ(自利)となって帰ってくるのです。

お釈迦様は、しばしば托鉢(たくはつ)をされましたが、これは乞食(こつじき)とも言われます。

鉢を持って家の前に立たれ、相手の方が布施されるきっかけを持たれるよう、各家々を歩かれました。

お釈迦様は、国王の保護を受けておられましたから、生活に困られることはありませんでした。

ただひたすら、相手の方が善いたねまき、行いを
なされることを念じてなされたことです。

いわゆる乞食(こじき)とどこが違うのでしょうか。

乞食(こじき)も家の前に立ち、施しを受けようとします。

読み方こそ違いますが、字も同じです。

何が違うのでしょうか。

お釈迦さまが托鉢(たくはつ)に出かけられると、

行く手が二股に分かれ、右へ行けば餓死する者もあるような大変貧しい
村、

左へ行けば地主や商人の多く住む裕福な町でした。

お釈迦さまが右に歩まれるのでお弟子が、

失礼ですが道を間違われたのではと申し上げた時のことです。

「道を間違えてはいない。

彼らが現在、餓死するほどに貧しいのは、

過去に欲深く、布施の功德を積まなかったからである」

布施の行いによってしか、恵まれない今を変える術はありません。

その貧しい村の者を本当に、思うならば、

それらの者にこそ、布施の機会を与えたいと、お釈迦様は思われたのです。

托鉢の目的は、施しを受けるのが目的ではなく、

相手の方が施しをされる機会を与えるのが目的だからです。

貧しい村では、わずかに頂かれたものをお弟子たちと分かち合わせ、

しばらく滞在され法を説かれたと伝えられております。

貧しき時与えるは富みて与えるに勝る、と言われます。

辛い時に、相手の幸せを念じて与える心こそ、素晴らしい、

布施は、ものからではなく、その心がけが大事であると、

お釈迦様は教えられました。

「施しは 生きる力の 元と知れ」

「慈悲蒔けば 衆苦の愁い遁れ去る」

親切、施し、与えることは、つらい時ほど、大事なのです。

辛い時ほど、布施をすれば、相手を思って親切に徹すれば(慈悲蒔けば)、

自分の悩み(衆苦の愁い)も吹き飛ばす(遁れ去る)でしょう。

今日はあまりみかけませんが、乞食(こじき)は、

鉢を持って家の前に立つ姿は、乞食(こつじき)と全く同じです。

姿も同じ、字も同じですが、心が180度違います。

この村は貧しいから、富める村に行って施しを受けたいと思うのが乞食(こじき)の心。

貧しい村に行って施しの機会を与えたいと思うのが、乞食(こつじき)です。

前者は我利我利亡者(自分さえよければよい)であり、

後者が自利利他(相手の幸せをひたすらに念ずる)の心です。

相手に施したつもりが、見返りを求める心は無いか。

それは、布施の精神ではなく、我利我利の醜い心ですよと、

教えられたのがお釈迦様でありました。

もうダメだ——
何も手につかない。



そう思った時、どんなアドバイスに耳を傾けたらよいでしょうか。

全てを投げ出してどこかへ行きたくなる。

何もかも、全部ダメなように思えてくる。

ある時、お釈迦様が托鉢(たくはつ)されている時、

貧しい女性が、お昼ごはんにと準備していた、

麦こがし(古代インド風ポップコーンとでも申しましょうか?)を

差し上げました。

「今あなたのなされた善根(善い行い)によって、
やがて必ず素晴らしい結果を得ますよ」

お釈迦様は、その女性を励まされたのです。

何しろ貧しい農家の夫妻。

横で見ていた主人が、怒ってお釈迦様に食ってかかりました。

「そんな口から出まかせを言いやがって！

そうやって、お前は麦こがしを巻き上げる気か！」

怒りに怒りで応酬するほどの愚はありません。

お釈迦さまは、まったく落ち着かれたご様子で、

「あなたは世の中で、これは珍しいというのを見たことがあるか」

と、さっと話題を変えられ尋ねられました。

すると、

「それは・・・あの多根樹ほど不思議なものは無いぞ。

一つの木陰に五百両の馬車をつないで、まだ余裕があるからなあ」

男が得意げに語るので、

「そうか。そんな、とてつもなく大きな木ならば、
タネはさぞかし大きかろうねえ。

ひき臼くらいはあるだろう。それとも、かいば桶くらいかな」

お釈迦さまは言われました。

「とんでもない。ほんのケシ粒くらいしかないよ」

ケシ粒といえば、日本ではアンパンに乗っている、
ゴマよりも小さい粒です。

そこままで男の答えを聞かれたお釈迦さまは、
「そんな小さなタネが、そんな大きな木になるとは、
誰一人信じないねえ」と言われたのです。

バカにされたと思った男は、頭から湯気を出し、
「だれ一人信じなくてもおれは信じている！」
と、真っ赤になって息巻きました。

そこで、お釈迦さまは言葉を改め教えられたのです。

「どんな麦こがしの小さな善根(ぜんごん。善い行い)といっても、
やがて縁によっては、大変素晴らしい結果を受けるのだ」

対機説法という言葉があります。

機とは、私たち人間の心のことです。

一人ひとりの心が、みな違いますから、

お釈迦様は、その人その人の心(機)に応じて(対して)、
教え(法)を説かれました。

応病与薬とも、隨機開導ともこれを言われます。

当意即妙のお釈迦様の御導きによって、

夫婦は直ちに仏弟子になったと伝えられます。

ものの本を読みますと、

もうだめだと落ち込んだ時には、

「まず、トイレのスリッパを揃えるところから始めましょう」

「手始めに、3分だけ机の上を整理してみましょう」

しかし、落ち込んでいる時に、

そんなことをやって、今の私がどうにかなるの？と、煩わしくさえ、
思えてしまうのです。

気象学で知られるバタフライエフェクト(効果)と言われるものがあります。
太平洋の上でモンシロチョウがはばたくと、
(太平洋の上に、モンシロチョウが生存できるのかは謎ですが・・・)
ニューヨークの天気が変わるとさえ言われるものです。

それくらい、気象現象はデリケートで、
何か1つの要素が微小に変わるだけでも、
大変な変化を引き起こすということです。

お釈迦様は、重々無尽の因果を説かれ、
ちょうど、私たちの行為と運命の関係は、
網の目のように複雑に絡み合い、
地面に置いた網の一点を持ち上げれば、
網全体がずるずると動くように、
何か小さなたねまき(行為)一つが変わるだけで、
人生全体が、じわじわと動いてゆくのです。

こんな小さなたねまきで、何が変わるか。

変わるも変わる、大変わりするのです。

スリッパを揃えたら、何だか少し気持ちよくなる。

トイレの掃除でもしてみようか。

窓掃除もしたくなってきた。

そうやって、家を掃除しているうちに、

何か心がすっきりして、

目の前の問題にも、取り組もうという気持ちが起きてきます。

川の水をいっきに飲みほすことはできなくても、

少しずつ飲むことはできるように、

目の前の悩み、苦しみを一挙に解決することができなくとも、

できることから、着実に対応してゆくことで道が開けてくるのです。

まいたたねは必ず生える、因果の道理を信じて、

よいたねを蒔きつづけなさい、

必ず幸せに恵まれるからと、教えられたのが

お釈迦様でありました。